

国語科書写における 毛筆での書字に関する一考察

—始筆の傾向と用筆との関連性を中心として—

衣川 彰 人

はじめに

平成 29 年 3 月 31 日に新学習指導要領が告示され、小学校国語科書写においては、従前にも増して、文字を構成する要素である「点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと」が重要視されることとなった。そうした中で、今後は、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を行うために、低学年においても、水書用筆等を使用した運筆指導を取り入れるなどの工夫が求められるようになる。

こうした新たな取り組みとともに、点画の指導をより効果的に行うためには、まず、学習者が陥りやすい用筆上の問題を把握し、それらの改善が図られるための方策を考えていくことが必要であろう。そこで、大学で書写教育について学ぶ学生が基本点画をどのような用筆法で書いているのか、また、文字を書く際にどのような意識を抱いているのかなどの書字に関する調査を行い、その結果をもとにして基本点画を書く際の書字傾向を探っていきたいと思う。

1. 書字に関する調査の実施について

今回の調査は、今後の書写書道教員の養成における課題と方策を見出す中でも、特に、国語科「書写」における用筆指導の在り方を考えるために、書字に関する意識と用筆の傾向についての基礎資料を作成することを目的として実施したものである。

(1) 調査対象

本調査は、国語（書写を中心とする）の免許取得のために開講している「書道演習Ⅰ～Ⅳ」を履修する学生を対象として実施し、履修生の中から無作為に抽出した 134 人の協力を得ることができた。

なお、本学では、書道演習の開講にあたり、受講生の実技経験年数や書写書道への興味関心を加味して上級・中級・初級の 3 つのクラス編成を行い、1 年後期より 3 年前期までの 2 年間に渡って書写の理論と実技を扱う授業を開講している。そのため、調査を実施した授業や、クラス編成により、年齢や技術レベルなどの違いがあり、調査の結果には、そうした点からの影響が多少あることも考えられる。調査を行った授業の開設時期と実技レベルおよび調査協力者数は下表に示したとおりである。

	開設学年・学期	クラス	男子	女子	合計
書道演習Ⅰ	1年・後期	中級	18	31	49
書道演習Ⅱ	2年・前期	上級	8	24	32
書道演習Ⅲ	2年・後期	上級	4	8	12
書道演習Ⅳ	2年・後期	中級	5	4	9
書道演習Ⅴ	3年・前期	中級	9	23	32
合 計			44	90	134

(2) 調査内容与方法

今回の調査では、基本点画を書く際の運筆を動画撮影するとともに、「用筆に関する調査アンケート」を実施した。運筆の調査は、楷書の基本点画の9種（横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり^(注1)）をそれぞれ半紙に書いてもらい、その際の筆の動きをビデオで撮影し動画サンプルとした。

また、動画撮影に協力してもらった者には、書字や用筆に関する次の4項目について、選択式によるものに自由記述を加えた形式で回答してもらった。

- ①書字や日常生活における利き手 ②基本点画についての意識
 ③毛筆・硬筆・その他の筆記用具の使用 ④縦書きと横書きを用いる割合

ここでは、これらの資料をもととして、基本点画の用筆の中でも、特に、始筆部に見られる傾向に焦点を絞って分析を進めていきたいと思う。

(注1) それぞれの基本点画は、標準的な形状のものとした。始筆や終筆、送筆方向などの違いから何種類か形状がある次の点画については、縦画は終筆を強く止める縦画（鉄柱）、転折は横（水平）方向から縦（垂直）方向の折れ、点は右下方向へ短く送筆する点、そりは右下方向へと弓なりに引くそり（戈法）に限定して調査を行った。

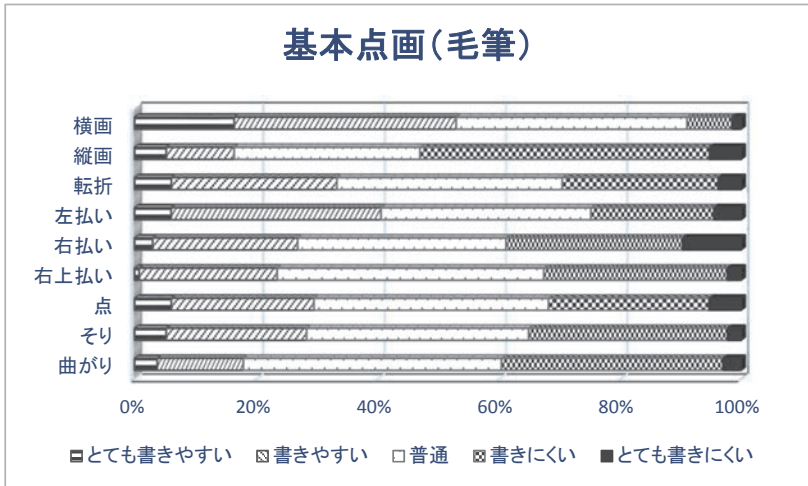
2. 基本点画への意識

毛筆で基本点画を書く際の始筆部にみられる傾向とその発生要因について探っていく前に、アンケート調査の集計結果の中から、基本点画を書くことに対して、どのような意識をもっているかを取り上げて見ておきたい。

アンケート調査では、漢字を構成する基本点画である「横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり」の9種それぞれについて、毛筆と硬筆で書く場合での意識について「とても書きやすい・書きやすい・普通・書きにくい・とても書きにくい」の5段階で回答してもらった。また、それぞれの点画を書く際に、思うことや気を付けていることについて自由記述してもらった。その中から、9種の基本点画について毛筆で書く際の意識についてまとめたのが下のグラフと表である。

なお、この表に示した数値は、男子学生と女子学生を併せた回答者数をもとに

算出したものである。毛筆と硬筆での意識の違いや、性別による差異などを通して見た点画ごとの特質については、別稿「書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察（1）」を参照いただきたい。



	とても書きやすい	書きやすい	普通	書きにくい	とても書きにくい
横画	16.4%	36.6%	38.1%	7.5%	1.5%
縦画	5.2%	11.2%	30.6%	47.8%	5.2%
転折	6.0%	27.1%	36.8%	25.6%	3.8%
左払	6.0%	34.6%	34.6%	20.3%	4.5%
右払	3.0%	23.9%	34.3%	29.1%	9.7%
右上払	0.7%	22.4%	43.3%	29.9%	2.2%
点	6.0%	23.3%	38.3%	26.3%	5.3%
そり	5.2%	23.1%	36.6%	32.8%	2.2%
曲がり	3.7%	14.2%	42.5%	36.6%	3.0%

では、ここからは、それぞれの点画への意識に関して分析するにあたり、上表の数値を次のように合算することにより点画への意識を考えていきたいと思う。

- ・書きやすさ……「とても書きやすい」「書きやすい」を合算した数値
- ・書きにくさ……「とても書きにくい」「書きにくい」を合算した数値

毛筆で書く際に、書きやすいとされているものは、①横画（約 53%）、②左払い（約 40.6%）、③転折（約 33.1%）の順である。反対に、書きにくいと思わ

れているものは①縦画（約 53%）、②曲がり（約 39.6%）、③右払い（約 38.8%）で、そのあと④そり（約 35%）、⑤右上払い（32.1%）、⑥点（約 31.6%）と続く。点は、書きにくさを感じている者の方が少し多いが、書きやすいとする者との差が 2.3%と僅かである。このように、全体を通してみると、基本点画を毛筆で書くことへの意識は、書きにくさを感じている者の方が多いという状況が窺える。

では、書きやすさと書きにくさの差はどこにあるのだろうか。最も書きやすいとされたのは横画で、約 53%の者が書きやすさを感じている状況にある。これに対して、最も書きにくいとされたのは縦画で、同じく約 53%の者が書きにくさを感じているという結果である。一本の線でも、運筆する方向が異なるだけで、全く逆の捉えられ方がされていることが分かった。また、これに続く 2・3 位となった点画においても、書きやすいとされたものが左払いと転折であり、書きにくいとされたものが曲がりと右払いと、こちらも、左下へ払うか右下へ払うか、横から縦へ折れるか縦から横へと曲がるかといった方向の違いで正反対の意識がもたれているという面白い結果となっている。もちろん、このような違いだけで、書きやすさや書きにくさへの意識に差がつくような単純なものではない。そこで、苦手意識がもたれている縦画についての自由記述を見てみると「真直ぐ書くよう気をつけてもなぜかなめになる」とあり、曲がりについては「角をつけず、なめらかに方向を変えるのが難しい」といった意見があるなど、用筆上の難点への意識が関係していることが分かる。そして、右上払いに関する意見の中には、筆を右上へと動かす際に「紙に引っかからないようにする」とのコメントがあるように、点画を書き進める方向と関係して起こる事象が意識に与える影響があることも分かる。これらの用筆上の難点について考えるためには、それぞれの基本点画が書かれる方向や、筆圧の変化などから生じる形状の違いなど、いろいろな要素を多角的に捉えながら探っていく必要があるだろう。こうした点を踏まえ、次からは 9 種の基本点画の用筆についてももう少し詳しく分析していきたいと思う。

3. 基本点画の用筆についての調査の結果とその分析

(1) 基本点画の用筆とその分析

ここからは、毛筆で点画を書くことへの意識が、実際に書く際の用筆に反映しているものなのか、どのような関連性が見られるのかについて見ていきたい。その方法は、今回の調査で収集した基本点画を書いてもらった半紙とその様子を撮影した動画サンプル、および用筆に関するアンケート調査に寄せられた意見とを照らし合わせながら考えていきたい。

①毛筆書写における基本点画の始筆での傾向

楷書を正しく整えて書くためには、それぞれの文字を構成する基本点画の一つひとつを正しい用筆法で書くことは言うまでもないことである。各点画は、始筆・送筆・終筆を「トン・スー・トン」と、いわゆる三過折のリズムで書き進められることになる。このリズムは、小学校3年生の書写の教科書においても、毛筆での基本点画を書く際のリズムとして「トン・スー・ピタ」などのリズムが表記されているものもある。基本点画の用筆において、「始筆」は、点画を書き出す最初の部分で、その後の送筆への影響も大きいため、用筆上最も大切な部分といってもよいだろう。しかし、今回の用筆の動画撮影とその分析をする中で、この始筆部分を適切に書くことが出来ないまま、送筆、終筆へと書き進めている学習者が多いという問題を目の当たりにしたところである。そこで、小論では、「始筆」に現れる傾向について、いくつかの観点から分析しながら考えていきたいと思う。

②始筆の入筆角度の傾向

ア、個々の書き方による傾向

始筆での用筆法は、露鋒や蔵鋒などさまざまなものがあり、入筆の角度も限定されたものではない。しかし、書写の用筆においては、おおよそ45度での入筆が標準とされる。確かに、この角度は、各点画や個人差によって、多少の違いがあるものと思われるが、ここでは、始筆の傾向を探るために、調査に協力してもらった134人が書いた基本点画の用筆サンプルの入筆角度について調査してみた。標準的な始筆の入筆

始筆の入筆傾向						人 数
正	緩	急	左	上	他	
0	6	3	0	0	0	1
1	0	8	0	0	0	1
1	1	7	0	0	0	1
1	2	6	0	0	0	1
1	3	5	0	0	0	1
1	4	4	0	0	0	1
1	6	2	0	0	0	1
1	8	0	0	0	0	1
2	0	7	0	0	0	1
2	1	6	0	0	0	1
2	2	4	1	0	0	1
2	2	5	0	0	0	6
2	3	3	1	0	0	2
2	3	4	0	0	0	4
2	4	3	0	0	0	2
2	5	0	2	0	0	1
2	5	1	1	0	0	2
2	5	2	0	0	0	2
2	6	1	0	0	0	4
2	7	0	0	0	0	2
3	0	5	0	0	1	1
3	1	5	0	0	0	2
3	2	4	0	0	0	3
3	3	3	0	0	0	4
3	4	1	0	1	0	1
3	4	2	0	0	0	9
3	4	1	1	0	0	1
3	5	1	0	0	0	7
3	6	0	0	0	0	2
4	0	5	0	0	0	5
4	1	2	0	2	0	1
4	1	3	0	1	0	1
4	1	4	0	0	0	3
4	2	2	1	0	0	1
4	2	3	0	0	0	5
4	3	2	0	0	0	6
4	4	1	0	0	0	2
4	5	0	0	0	0	7
5	0	4	0	0	0	4
5	1	3	0	0	0	5
5	2	2	0	0	0	5
5	3	1	0	0	0	7
5	4	0	0	0	0	3
6	0	3	0	0	0	2
6	1	2	0	0	0	3
6	2	1	0	0	0	1
6	3	0	0	0	0	3
7	1	1	0	0	0	3
7	2	0	0	0	0	1
合 計						134

角度と考えられる約 45 度であるものを「正」として、それよりも入筆角度が緩いものを「緩」、急な角度のものを「急」とした。また、極端に角度が緩くほぼ横向きに入筆しているものを「左」、極端に上向きに上部から入筆しているものを「上」、その他の特殊なものを「他」として分類した。その結果をまとめたものが、前頁の表である。

この表は、1 人が書いた 9 種の基本点画を「正」「緩」「急」「左」「上」「他」に分類して、それぞれいくつずつあるかをもとに入筆傾向をパターン化し、パターンごとの人数も示したものである。

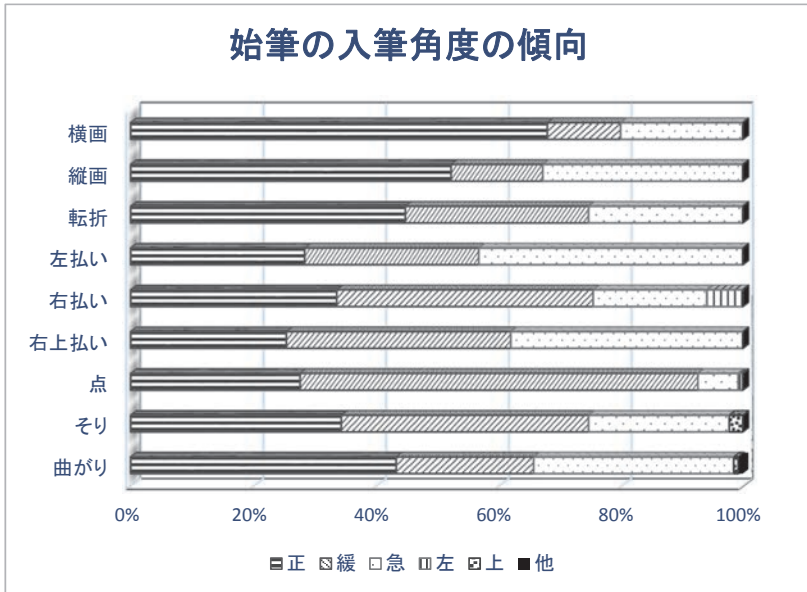
9 種の基本点画（横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり）すべてにおいて、統一して「正」で入筆出来ていた者は 1 人もいなかった。逆に、9 種すべてにおいて「正」とならなかった者が 1 人ある。表の最初のところに掲載している者を見ると、9 種の基本点画中、「緩」が 6 種、「急」が 3 種となっている。それ以下、「正」で書かれていたものが 1 種であったものから順に、パターン別に配してある。その結果を見ると、多いものでも 9 種類中 7 種類の点画でしか「正」で入筆出来ておらず、その人数も 134 人中の 4 人と僅かであった。この 4 人の始筆傾向の内訳は、「正」が 7 種、「緩」が 2 種のパターンの者が 1 人。「正」7 種、「緩」1 種、「急」1 種のパターンの者は 3 人であった。その他も「正」の種類ごとに見ると、6 種類の点画で「正」の入筆を行っていた者が 9 人、5 種類の者は 24 人、4 種類の者が 31 人、3 種類の者は 30 人、2 種類だった者が 28 人と続いていく。このような分布を見ると、9 種類すべての点画において、一定して約 45 度で入筆することがいかに難しかがよく分かるところである。そして、さらに、「正」以外の「緩」「急」「左」「上」「他」の傾向の発生状況も考慮して細分化すると、全体で 49 パターンに分類することが出来る。

こうした結果から考えると、点画の入筆は、個々の書き方などによる個人差によって、角度の急なものばかりとなったり、緩いものばかりになるといったわけではないようである。

イ、それぞれの基本点画にみられる始筆部の傾向

それでは、始筆部の入筆角度には、点画ごとの特質による差があるのだろうか。そこで、今度は、134 人の入筆の角度の傾向を点画別にまとめ直したものが、次頁のグラフと表である。これを見ると、約 45 度の角度で入筆されているものは、「横画」が 68.7% と最も多く、次いで「縦画」の 52.2%、「転折」が 44.8% となっている。これらは、いずれも直線で書かれる点画である。また、これに次いで「曲がり」も 43.3% が「正（約 45 度）」の傾向であった。「曲がり」は、運筆の途中でアルファベットの L のように方向転換する際に、曲線で曲げて書かれるものであるが、始筆から方向転換へ至るまでの下方へ運筆する部分はほぼ直線的に書かれる。曲がった後の、右へと仰ぐように運筆される部分も横画に近い書きぶりとなる。このようなことからすると、「曲がり」の

運筆は、方向転換部分以外は直線的な用筆によるといえよう。このように捉えると、「縦画」「縦画」「転折」「曲がり」は、始筆から水平方向か垂直方向へと運筆して直線で書かれるものであるといえる。そのため、書き進められる直線の形状と進行方向とを思い描きやすく、それと照らし合わせることによって、入筆角度の目安もイメージしやすくなり、標準的な約45度で入筆することが出来ている者が多いのではないかと考えられる。これに対して、入筆角度が緩くなったり、急になったりする傾向があるものは、



	正	緩	急	左	上	その他
横画	67.9%	11.9%	20.1%	0.0%	0.0%	0.0%
縦画	52.2%	14.9%	32.8%	0.0%	0.0%	0.0%
転折	44.8%	29.9%	25.4%	0.0%	0.0%	0.0%
左払い	28.4%	28.4%	43.3%	0.0%	0.0%	0.0%
右払い	33.6%	41.8%	18.7%	6.0%	0.0%	0.0%
右上払い	25.4%	36.6%	38.1%	0.0%	0.0%	0.0%
点	27.6%	64.9%	6.7%	0.7%	0.0%	0.0%
そり	34.3%	40.3%	23.1%	0.0%	2.2%	0.0%
曲がり	43.3%	22.4%	32.8%	0.0%	0.7%	0.7%

「左払い」「右払い」「そり」「点」である。これらは、すべて書く際に斜めの方向に運筆されるもので、書かれる点画の形状には曲線的な要素が含まれるものである。そのため、書く際に思い描く点画の形姿に対して、45度に入筆する角度の目安がつけづらく、ブレが生じやすくなっていることが考えられる。このようなこともあり、書く際に思い描く点画のイメージとも相まって、最初に筆を入れる際の角度や入れ方に違いが表れてきているようである。このほか、「左払い」では、左下への運筆のイメージからか、入筆角度が45度よりも急になる傾向にあり、「右払い」や「点」では、始筆部から右下へと「へ」の字状に運筆しやすいように、45度よりも少し緩めに入筆する傾向が見られる。特に、「右払い」では、その傾向がさらに極端になり「左」から横向きに入るものも一部見られるようである。また、「そり」では、右下へと弓なりにカーブを描いて運筆しやすいように、書き出す際に少し肘を張るような意識が働くことが影響して、45度よりも少し緩めの角度での入筆につながっているのではないかと考えられる。なお、「そり」では、逆に肘を張るのではなく、入筆角度を極端に急にして「上」から入れて筆を回すようにしながら曲線を書き進める例も一部見られた。

ここまで見てきたように、始筆部での入筆角度の揺れは、個々が持つ特有な書き癖のようなものではなく、それぞれの点画の形状や運筆方向などと関係した用筆上の特性として表れるものであることが分かった。しかし、始筆部での用筆では、入筆の角度だけが問題となるところではない。入筆角度以外にも、穂先を紙面に入筆してから送筆へと移行するまでの間に行う筆圧の微妙な加減が原因となる余分な線などを生じたものもあり、単純に分析・分類をすることは難しいものがある。次からは、入筆角度以外の問題についても分析していきたいと思う。

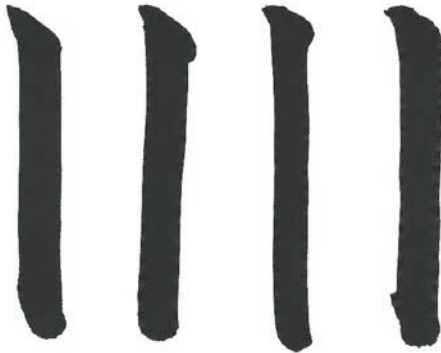
③基本点画始筆の用筆上の傾向

ここからは、基本点画の始筆部の入筆傾向のデータを再度細かに分析して、角度以外に見られる用筆上の問題についても考えていきたい。始筆は、約45度の角度で左上方から入筆し、筆圧を加えて一旦停止する。その後進行方向へと動作を起こして送筆へと書き進めることになる。こうした入筆から送筆へと移行する一連の動作は、各基本点画により異なるため、すべてに共通したものではないが、今回、用筆サンプルの分析を進めてみたところ、いくつかの同じような傾向が見られた。その傾向は、始筆部で入筆したあと、送筆へと移行していく際の動きや筆圧のかけ具合などの諸要素が、書かれる書線の形姿へ何らかの影響を与えているものである。例えば、入筆から送筆へと移行する間に、穂先の動きや筆圧の変化を受けて、左上方に尖ったツノのような突起した形状が出来るものがあったり、右下方にコブのような丸く押さえられた跡が残るなどの傾向が見られる。これらの傾向は、書字者の筆の動かし方によるところが大きいいため、ツノのよう

に突起した形状を生じやすい者であったり、コブのような押さえ方を多く起こしやすい者など、書字者ごとの用筆上の癖として、発生の有無に偏りも見られる。しかし、どの点画においても一様に生じているものではなく、点画ごとに発生率の違いも見られる。そこで、ここでは、こうした傾向がどの程度表れるのか、基本点画の用筆サンプルと動画サンプルの分析を通してその要因について考えていきたい。

なお、これ以降では、始筆部において、左上方に尖ったツノのような突起した形状のものを「ツノ」、右下方にコブのように丸く押さえられた跡が出来たものを「コブ」、両者が見られるものを「ツノコブ」とし、これ以外に、穂の動きがネジレを起こしているものを「ネジレ」、筆圧が上手く加えられず弱くなっているものを「弱」、必要以上に筆圧が加えられて太く重くなっているものを「重」として見ていきたい。また、これらの運筆上の問題がなく良好に書かれているものは「良」として分析することとした。

さまざまな始筆の用筆の例



左から順に
「ツノ」
「コブ」
「ツノコブ」
「ネジレ」

ア、個々の書き方による傾向

134人に書いてもらった9種類の基本点画の用筆サンプル1,206例の中から「ツノ・コブ・ツノコブ・ネジレ・弱・重」の6つの現象の発生率に目を向けてみると、次のようになる。

始筆の傾向	良	ツノ	コブ	ツノコブ	ネジレ	弱	重
全体の個数	601	308	45	70	47	110	25
発生率	約 49.8%	約 25.5%	約 3.7%	約 5.8%	約 3.9%	約 9.1%	約 2%

これを見ると、約半数は良好な運筆がされているものの、約4分の1では、ツノ現象が起きていることが分かる。この数値を多いとるか少ないとるかは考え方が分かるところであろうが、あくまでも、全体から見た発生率であるため、134人の個別に集計しなおしてみると、下に示した表のようになる。

始筆の傾向							人 数	始筆の傾向							人 数	始筆の傾向							人 数
良	ツノ	コブ	ツノコブ	ネジレ	弱	重		良	ツノ	コブ	ツノコブ	ネジレ	弱	重		良	ツノ	コブ	ツノコブ	ネジレ	弱	重	
1	5	0	0	1	1	1	1	4	1	0	2	2	0	0	1	5	2	0	0	0	2	0	2
1	6	0	0	0	1	1	1	4	1	1	0	3	0	0	1	5	2	0	0	1	1	0	2
2	0	0	0	5	1	1	1	4	1	1	1	0	2	0	1	5	2	0	1	0	1	0	2
2	1	0	0	0	5	1	1	4	1	2	0	0	1	1	1	5	2	1	0	0	0	1	2
2	1	0	1	1	4	0	1	4	1	2	0	0	2	0	1	5	2	1	0	0	1	0	2
2	2	1	2	0	1	1	1	4	1	3	0	0	1	0	1	5	2	2	0	0	0	0	1
2	3	0	0	2	2	0	1	4	2	0	0	0	1	2	1	5	3	0	0	0	1	0	5
2	4	1	1	1	0	0	1	4	2	0	0	0	2	1	1	5	3	0	0	1	0	0	1
2	5	0	0	0	2	0	1	4	2	0	0	1	1	1	1	5	3	0	1	0	0	0	1
2	5	0	2	0	0	0	1	4	2	0	0	2	1	0	1	5	3	1	0	0	0	0	2
2	6	0	0	0	1	0	1	4	2	0	2	0	1	0	1	5	4	0	0	0	0	0	2
2	6	0	0	1	0	0	1	4	2	0	2	1	0	0	1	6	0	0	0	0	3	0	1
2	6	0	1	0	0	0	4	4	2	0	3	0	0	0	1	6	0	1	1	0	1	0	1
2	7	0	0	0	0	0	1	4	2	1	1	0	0	1	1	6	0	2	1	0	0	0	2
3	0	0	1	2	3	0	1	4	3	0	0	0	1	1	1	6	0	3	0	0	0	0	1
3	1	0	1	3	1	0	1	4	3	0	0	0	2	0	1	6	1	0	0	0	2	0	1
3	1	2	1	1	1	0	1	4	3	0	0	1	1	0	1	6	1	0	1	0	0	1	1
3	2	0	0	0	3	1	1	4	3	0	2	0	0	0	2	6	1	0	2	0	0	0	1
3	2	0	1	0	2	1	1	4	3	1	0	0	1	0	1	6	1	1	0	1	0	0	1
3	2	0	2	2	0	0	1	4	3	1	1	0	0	0	1	6	2	0	0	0	0	1	2
3	2	0	3	0	0	1	1	4	4	0	0	0	1	0	1	6	2	0	0	0	1	0	1
3	3	0	0	3	0	1	1	4	4	0	0	1	0	0	1	6	2	0	0	1	0	0	1
3	3	0	0	2	1	0	1	4	4	0	1	0	0	0	1	6	2	0	1	0	0	0	2
3	3	0	2	0	1	0	1	4	5	0	0	0	0	0	3	6	2	1	0	0	0	0	3
3	4	0	0	0	2	0	2	5	0	0	0	0	4	0	1	6	3	0	0	0	0	0	3
3	4	0	1	0	1	0	1	5	0	0	0	2	1	1	1	7	0	0	0	0	2	0	1
3	4	0	2	0	0	0	2	5	0	1	0	0	2	1	1	7	0	0	2	0	0	0	2
3	5	0	0	0	1	0	1	5	0	1	0	0	3	0	1	7	0	1	0	0	1	0	1
3	5	0	0	1	0	0	1	5	0	1	3	0	0	0	1	7	1	0	0	0	1	0	1
3	5	1	0	0	0	0	1	5	1	0	0	0	3	0	1	7	1	1	0	0	0	0	1
3	6	0	0	0	0	0	2	5	1	0	0	1	2	0	1	7	2	0	0	0	0	0	2
4	0	0	1	2	1	1	1	5	1	0	2	0	0	1	1	8	0	0	0	0	1	0	2
4	0	1	1	2	0	1	1	5	1	0	3	0	0	0	1	8	0	0	1	0	0	0	1
4	1	0	0	0	4	0	1	5	1	1	0	0	1	1	1	8	0	1	0	0	0	0	1
4	1	0	1	2	1	0	1	5	1	1	1	0	1	0	1	8	0	1	0	0	0	0	1

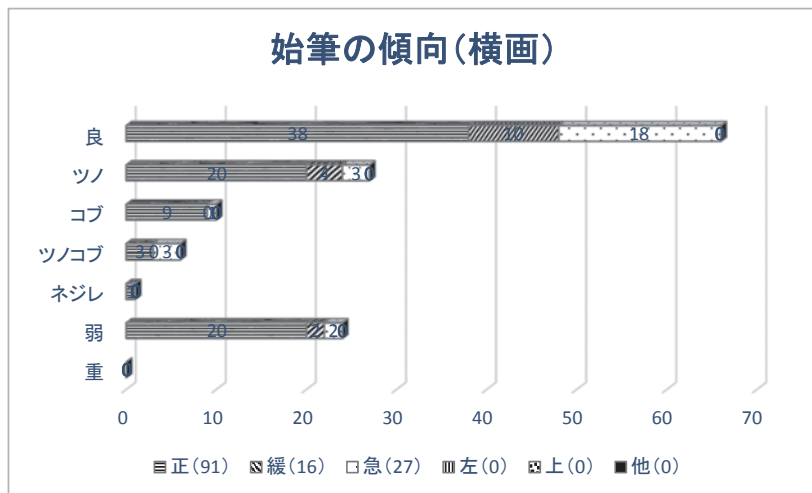
これは、9種類の基本点画の用筆サンプル134人分を、始筆部で起こる用筆上の問題である「ツノ・コブ・ツノコブ・ネジレ・弱・重」の6つの現象と「良」のそれぞれの発生個数をもとに発生パターンとして分類し、パターンごとの人数も示したものである。今回の調査では、9種すべての基本点画で特別な問題もなく良好に運筆出来ている者はいなかった。8種類で「良」となる者が4人あったが、残りの1種類で「ツノ」や「ツノコブ」などの問題を生じていた。「良」の部分だけに目を向けても、1種類の者から8種類の者まで分かれるが、さまざまな始筆の傾向が組み合わさった発生パターンは実に104パターンと多岐にわたっている。これらの発生パターンを見ると、特定の現象を多く生じやすい書き方をする用筆傾向にある者がいないわけではないが、134人が何らかの用筆上の問題をそれぞれ組み合わせで起こしているようである。そのため、個々の書き方による用筆の問題が顕著な偏りとして表れているわけでもなく、何種類かに系統立てることが出来るようなものでもない。そこで今度は、これを再度、基本点画ごとにまとめ直すことによって、改めて用筆上の問題の発生について考えていきたい。

イ、それぞれの基本点画にみられる始筆部の傾向

基本点画ごとの始筆の用筆傾向を探るにあたっては、9種の基本点画が書かれる運筆方向をもとに、「水平方向、垂直方向、斜め方向（右下・右上・左下）」の3つに分けて見ていこうと思う。

a、水平方向

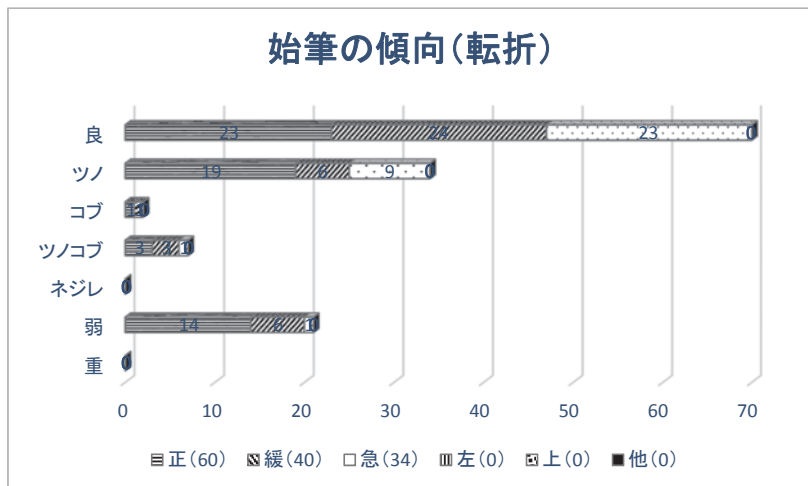
始筆から水平（右）方向へと運筆されるのは、横画と転折がある。横画は、前掲の基本点画について毛筆で書く際の意識についてのアンケート調査では、半数以上の者が書きやすいと回答し、苦手意識をもっていたものは9%と僅かであった。始筆の用筆に表れた傾向を見てみると、入筆の角度については、134人中91人（67.9%）が約45度の標準的な角度で入筆していて、9種の基本点画中、最も高い率である。また、下のグラフに示したように、用筆傾向としては、半数（66人）が良好な用筆で運筆出来ている。残りの半数の傾向に目を向けると、筆圧のかけ具合が弱いもの（24人・約18%）や送筆への移行時に筆圧が抜けてしまうなどから、ツノ（27人・約20%）やコブ（10人・約7.4%）、ツノとコブの両方もを生じてしまっているもの（6人・約4.4%）といったさまざまな状況が見られる。しかし、コブやツノコブの発生率は少なめで、ネジレに関しては134人中1人（約0.7%）だけと、用筆上の問題はツノ現象に偏っているようである。



横画	正 (91)	緩 (16)	急 (27)	左 (0)	上 (0)	他 (0)
良	38	10	18	0	0	0
ツノ	20	4	3	0	0	0
コブ	9	0	1	0	0	0
ツノコブ	3	0	3	0	0	0
ネジレ	1	0	0	0	0	0
弱	20	2	2	0	0	0
重	0	0	0	0	0	0

次に転折について見てみると、こちらも、良好な運筆によるものが半数以上（70人・約52%）と一番多く、次いで左上方にツノのような突起が出来るもの（34人・約25.3%）や筆圧の弱いもの（21人・約15.6%）が見られるが、コブ（2人・約1.5%）やツノコブ（7人・約5.2%）の発生は少なめでネジレの発生は全くない。

このように始筆での用筆傾向は横画とよく似ている。横画と違う点は、転折では、入筆角度を緩やかにして書き出す者が増える傾向にある。点画に対するアンケート調査での転折への意識を見ると、「折れ曲がりを気をつけている」や「一度きちんと止めてから曲げるようにしている」などの意見が多く見られ、方向転換する運筆への意識が強く向けられていることが分かる。このことからすると、転折では、書き出す際に、横画から縦へと折れ曲がっていく動作を思い描くことにより、右回りに運筆する流れへの意識が起これ、そうした意識を持つ中で、方向転換をより滑らかに出来るような体勢を作ろうとして、始筆での入筆角度を少



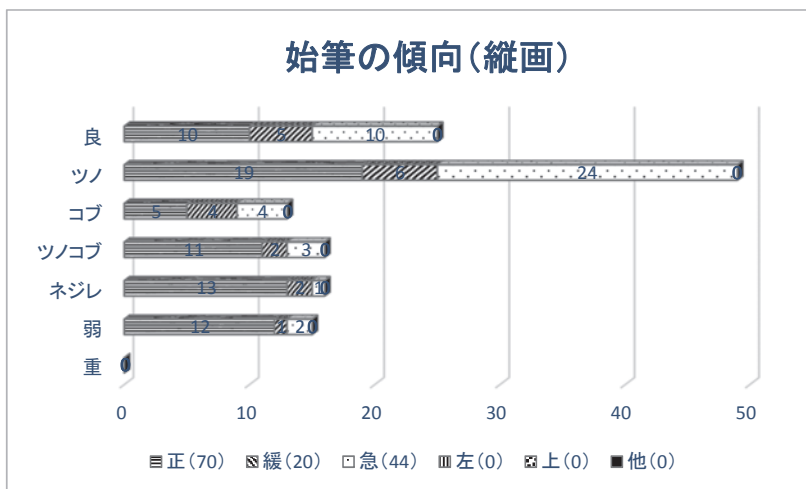
転折	正 (60)	緩 (40)	急 (34)	左 (0)	上 (0)	他 (0)
良	23	24	23	0	0	0
ツノ	19	6	9	0	0	0
コブ	1	1	0	0	0	0
ツノコブ	3	3	1	0	0	0
ネジレ	0	0	0	0	0	0
弱	14	6	1	0	0	0
重	0	0	0	0	0	0

し緩めにするといった現象が起こっているのではないかと考えられる。

水平方向へと運筆する横画や転折においては、約半数が良好な運筆で書かれ、コブやツノコブといった用筆上の問題の発生率が少ないのが特徴である。これは、横画や転折では、始筆部に加えられる筆圧が中程度であるため、進行方向である右へと筆を動かす際の摩擦がさほど強くなく、送筆へと移行する際に無理な力が加わることも少ないことが影響していると思われる。しかし、その反面、ツノ現象の発生がどちらにも見られる。ツノ現象は、始筆から送筆へと移行する際に穂先の筆圧が抜け気味になることから尖ったツノのような形状が出来るものと考えられる。横画と転折においては、始筆から送筆へと移行する際に筆を横へと引っ張るように動かすものが見られるが、そうした用筆が、穂先の力の抜けを招き、こうしたツノ現象の発生につながっていると考えることが出来る。

b、垂直方向

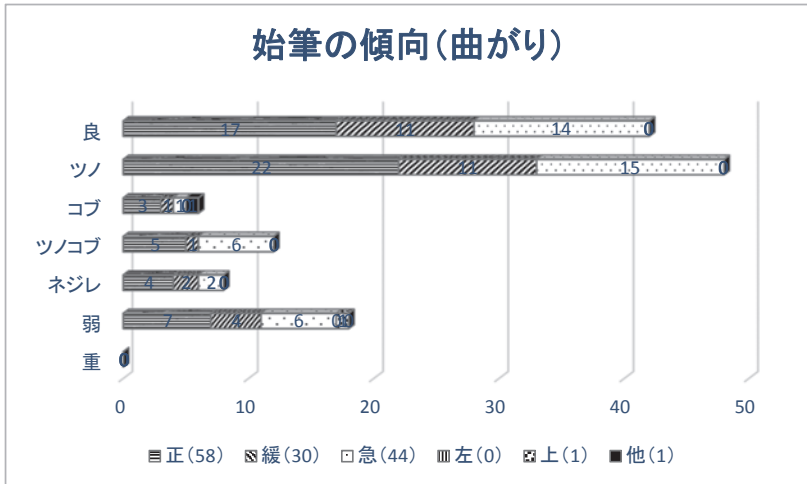
始筆部から垂直方向へ運筆して書き進められる点画は、縦画と曲がりがある。どちらも、入筆した後、十分な筆圧を加えてから垂直方向へと送筆される。今回調査した縦画の鉄柱は、始筆部からの筆圧を維持したまま、終筆まで書き進められるものであるが、今回の調査結果を見ると、始筆を良好に書くことが出来ているのは、134人中25人と約19%の者だけであった。点画を書く際の意識調査では、「縦画」を毛筆で書くことに、約53%もの者が苦手意識をもっていたが、そうし



縦画	正 (70)	緩 (20)	急 (44)	左 (0)	上 (0)	他 (0)
良	10	5	10	0	0	0
ツノ	19	6	24	0	0	0
コブ	5	4	4	0	0	0
ツノコブ	11	2	3	0	0	0
ネジレ	13	2	1	0	0	0
弱	12	1	2	0	0	0
重	0	0	0	0	0	0

た意識を反映してか、実際に書かれた書線から、用筆上の傾向を調査したところ、80%以上の者に何らかの問題があった。最も多い問題は、左上方にツノ状の突起が生じるものが49人(約36.5%)あった。これは、筆圧が筆の腹の方に偏り、穂先まで筆圧をうまく加えることが出来きていないことから、送筆へと移行する

際に穂先部の力が抜けてしまい、進行方向へと上手くつなげていくことが出来ないものである。これとは別に、始筆の下部に丸い押さえた跡のようなものが出来るコブ現象を起こしたものが13人(約9.7%)あった。この現象は、送筆への移行時に、筆の腹の方の筆圧が抜けてしまうことにより、送筆へと滑らかにつなげることが出来ないことからコブ状の押さえが生じると考えられる。そして、入筆とともに加えた筆圧を上手く維持できず、送筆へと移行する際に穂先と腹の両者の力が抜けてしまうことから、ツノ状の突起とコブ状の押さえの両方を生じることになったものが16人(約11.9%)あった。さらに、送筆への移行時に進行方向へとスムーズに移行することが出来ず、無理な動きが起こり、穂先が進行方向とは逆に動いてしまうネジレを起こしているものも16人(約11.9%)あった。また、そもそも筆圧が弱く、加えるべき筆圧が十分に加えられていないものも15人(約11.2%)あり、さまざまな傾向が見られた。



曲がり	正 (58)	緩 (30)	急 (44)	左 (0)	上 (1)	他 (1)
良	17	11	14	0	0	0
ツノ	22	11	15	0	0	0
コブ	3	1	1	0	0	1
ツノコブ	5	1	6	0	0	0
ネジレ	4	2	2	0	0	0
弱	7	4	6	0	1	0
重	0	0	0	0	0	0

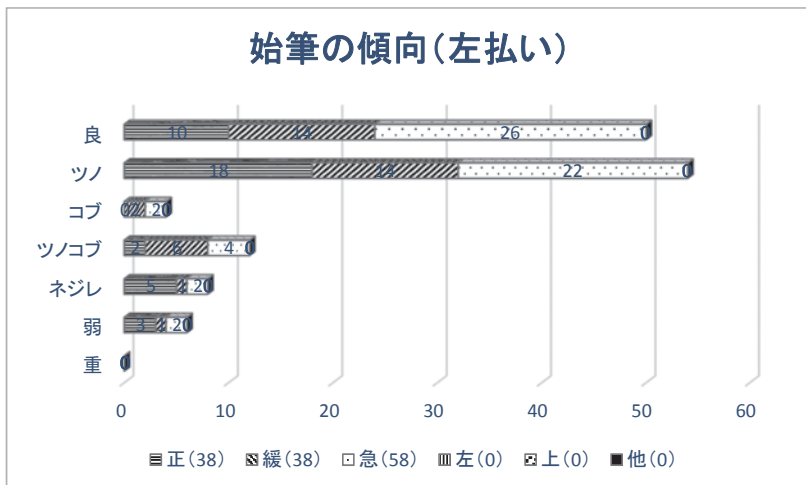
これに対して、曲がりでは、良好なものが42人(約31.3%)と縦画に比べて10%強多くなるほか、筆圧の加え方が弱いものも18人(約13.4%)で2%ほど多くなる。しかし、それ以外の傾向は、ツノ状の突起を生じたものが48人(約35.8%)、コブ状の押さえを生じたものが6人(約4.5%)、ツノとコブの両方が表れたものが12人(約8.9%)、ネジレが起こったものが8人(約6%)と数は若干減るようではあるが、縦画同様のさまざまな問題が半数以上見られた。こうした問題の分布も、縦画にとってもよく似た傾向であった。

縦画や曲がりでは、横画などよりも始筆の際に強い筆圧が加えられ、そうすることにより生じる筆の弾力を活かした運筆が行われる。しかし、送筆へと移行する際に、一度加えた筆圧を維持して動き出すことはなかなか難しいものがある。また、下方への意識が強く働き、垂直方向へと運筆する際に筆を下へと引っ張るように動かしてしまうことも、筆圧の抜けを生じさせる要因となっているだろう。ただし、縦画よりも曲がりの方が良好な運筆が見られるのは、曲がりにおいては、下へと強く引っ張るように運筆するのではなく、L字形のように曲げていく形状への意識が働くことによって、左回り気味に筆を動かしていくところから、穂先の力が抜けにくくなって、無理なく進行方向へと動かすことが出来ているのではないと思われる。そのため、送筆部での穂先の移動も良好に行われている者が圧倒的に多くなる傾向にあるようである。

c. 斜め方向

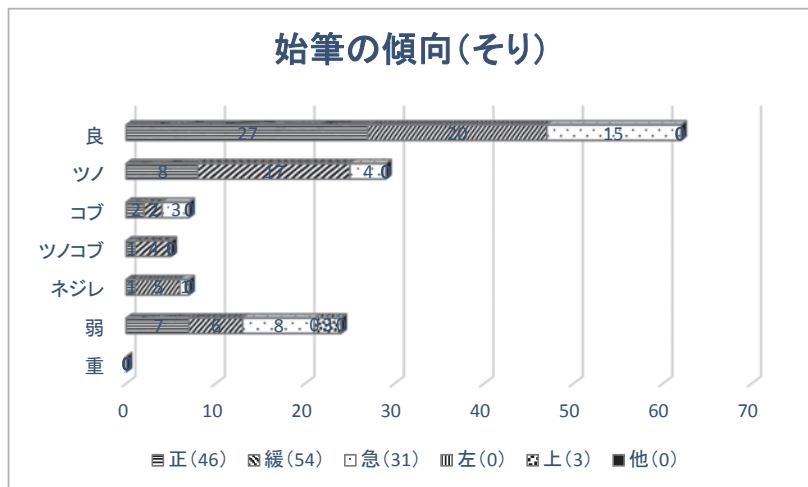
斜め方向へと運筆される点画は5種類ある。左下方向へと運筆される左払い、右上方向へと運筆される右上払い、右下方向へと運筆される右払いと点、そしてそりである。この中で、左払いとそりの用筆の傾向は、縦画や曲がりに通ずる点が見られる。

まず、左払いについて見てみると、良好な用筆は50人(約37.3%)であるのに対して、ツノ現象の方が多く見られ、54人(約40.2%)である。このほかにツノとコブの両方が見られるものが12人(約8.9%)、ネジレは8人(約6%)、コブの発生が4人(約3%)などが見られる。左払いは、始筆の際に加えられた強い筆圧を左下へと運筆しながら次第に弱めていき、筆先をまとめていくことによって払いとなるものである。こうした筆圧の変化から出来る払いの形状が曲線的になることもあってか、「左払い=曲線」といった固定観念をもってしまっている者もあるようである。そのため、左カーブを描くように運筆され、始筆から送筆へと移行する際に、一旦下方向へと筆を引いて動かしていく傾向が見られる。そのため、縦画と同じように、筆圧の抜ける現象が起こるようである。



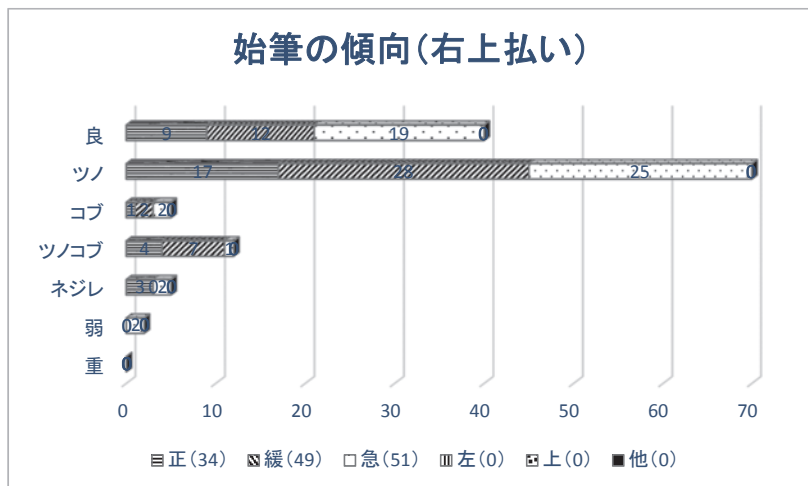
左払い	正 (38)	緩 (38)	急 (58)	左 (0)	上 (0)	他 (0)
良	10	14	26	0	0	0
ツノ	18	14	22	0	0	0
コブ	0	2	2	0	0	0
ツノコブ	2	6	4	0	0	0
ネジレ	5	1	2	0	0	0
弱	3	1	2	0	0	0
重	0	0	0	0	0	0

また、その始筆の傾向においても、良好なものが62人(約46.2%)ある一方で、ツノ現象も29人(約21.6%)見られる。そりは、曲がりと同様の運筆傾向があり、左回りのカーブを描いた運筆で書かれることから、穂先の力の抜けが少なくなり、良好な用筆で書いているものが多く見られる。しかし、その反面で、垂直方向への意識が強く働く傾向も見られ、運筆する際に筆を下へと引っ張り気味に動かしてしまうケースも現れていて、ツノ(29人・約21.6%)以外にツノコブ(5人・約3.7%)、ネジレ(7人約・5.2%)などの現象も見られる。また、約45度の斜めの入筆ではなく、穂先を真上から入筆させて、そのまま下へと運筆するものも3人(約2.2%)ある。これは、右下へ弓なりに曲げて運筆しやすいようにするために、入筆角度を極端に急にして、「上」から入れたあと、筆を回すようにしながら曲線を書き進める特殊な例であるといえよう。



そり	正 (46)	緩 (54)	急 (31)	左 (0)	上 (3)	他 (0)
良	27	20	15	0	0	0
ツノ	8	17	4	0	0	0
コブ	2	2	3	0	0	0
ツノコブ	1	4	0	0	0	0
ネジレ	1	5	1	0	0	0
弱	7	6	8	0	3	0
重	0	0	0	0	0	0

次に、右上払いについて見てみると、70人（約52.2%）がツノ現象を起こしている。これは、入筆から送筆する際に、レ点のように運筆しているために、穂先の尖った形状が残りが残っていることが要因のようである。また、コブ現象が5人（約3.7%）、ツノとコブの両方の現象が出ているものが12人（約8.9%）ある。これらは、始筆部で点を打つように一度押さえたあと、そこから右上へと撥ね上げるように運筆していることが、ツノとコブの発生につながっていると思われる。このように、右上払いにおいては、65%近くの者に筆圧の抜けが起こっているほか、ネジレの現象も5人（約3.7%）に見られ、良好な運筆が出来ている者は40人（約30%）と縦画に次ぐ少なさである。右上払いは、点画の意識調査においても、毛筆で書く際は、約3割（32.1%）の者が書きにくさを感じている。右上へと反り上げるような運筆は、日常生活の中でもあまり行うことが少ない動きで、慣れない動作であると言えよう。そうしたことも影響して、不安定な用筆と苦手意識ともに多くなることにつながっているのではないかと考えることが出来る。



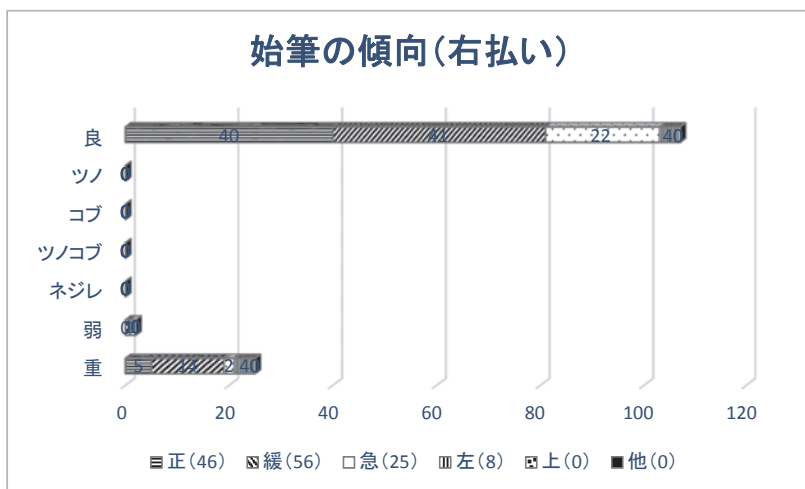
右上払い	正 (34)	緩 (49)	急 (51)	左 (0)	上 (0)	他 (0)
良	9	12	19	0	0	0
ツノ	17	28	25	0	0	0
コブ	1	2	2	0	0	0
ツノコブ	4	7	1	0	0	0
ネジレ	3	0	2	0	0	0
弱	0	0	2	0	0	0
重	0	0	0	0	0	0

ここまで見てきた用筆の傾向とは対照的なのが、右払いと点である。右払いは、始筆では弱い筆圧で入筆した後、次第に右下へと筆圧を加えながら運筆し、一旦止まってから、方向を右へと変えて徐々に払っていくという、筆圧の強弱と進行方向の変化が複雑に絡み合った用筆で書かれる。そのため、毛筆では38.8%の者が書きにくさを感じているものである。

右払いの始筆での傾向は、入筆角度が緩めのものが56人(約41.7%)あり、極端に横向きになる左からの入筆も8人(約6%)見られるなど、半数近くが45度よりも緩い角度で書き始めている。しかし、用筆としては、良好な運筆が出来ているものが107人(約79.8%)とかなり多く、それ以外のツノ、コブ、ツノコブ、ネジレといった問題が生じていない。用筆の問題としては、右払いの始筆は、本来、弱めの筆圧で細く入筆される場所であるが、穂先を上手く使えないことから、太くて重い入筆になってしまうケースが25人(約18.6%)あったほか、

(46)

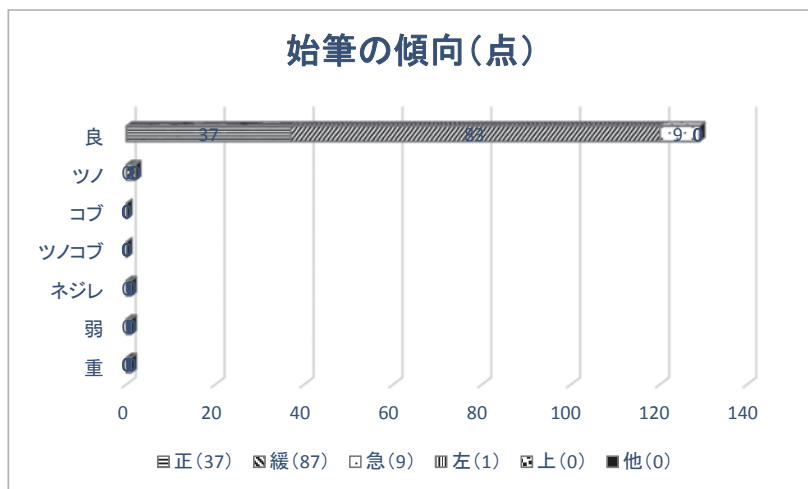
逆に弱くなりすぎてしまったものも2人(約1.5%)あるなど、筆圧の強弱の調整が上手くつけることが出来ないものが一部見られた。



右払い	正 (46)	緩 (56)	急 (25)	左 (8)	上 (0)	他 (0)
良	40	41	22	4	0	0
ツノ	0	0	0	0	0	0
コブ	0	0	0	0	0	0
ツノコブ	0	0	0	0	0	0
ネジレ	0	0	0	0	0	0
弱	0	1	1	0	0	0
重	5	14	2	4	0	0

点は、角度や運筆方向、形状などからさまざまな種類があり、文字の中のどの位置に打たれるかによって使い分けされるため、用筆の傾向については、一様に考えられるものではない。しかし、今回調査した右下方向へ短く送筆する点においては、入筆角度の傾向が45度よりも緩めとなるものが多く、87人(約64.9%)であった。また、極端に緩い角度で左向きから入筆しているものが1人(約0.7%)あるなど、全体的に右払い以上に緩い角度で書き始められている。点について、意識調査の自由記述を見てみると、「大きさや太さ、角度など、小さいからこそ調整が難しい」というような、用筆の難しさへの意見が見られた。しかし、始筆部分の用筆上の傾向に限って見ると、大多数の129人(約96.2%)が良好な運筆

で書いており、これ以外の問題は、ツノ現象が2人（約1.5%）、ネジレと弱いものがそれぞれ1人（0.7%）ずつあるだけで、大きな問題なく書かれていた。



点	正 (37)	緩 (87)	急 (9)	左 (1)	上 (0)	他 (0)
良	37	83	9	0	0	0
ツノ	0	2	0	0	0	0
コブ	0	0	0	0	0	0
ツノコブ	0	0	0	0	0	0
ネジレ	0	1	0	0	0	0
弱	0	1	0	0	0	0
重	0	0	0	1	0	0

このように、右払いも点も、概ね始筆での用筆傾向は良好であった。これは、どちらも、弱い筆圧で入筆するものであり、送筆も右下へと運筆されることから、左上から入筆したあと、そのまま無理なく自然に書き進めることができる。そのため、始筆部での筆圧の抜けや引っ掛かりなどの余計な動きも起こらないため、他の点画で見られるような、用筆上の問題が生じにくいと考えることができる。

以上のように9種の基本点画の進行方向をもとに、水平方向・垂直方向・斜め方向に分けて分析してみると、それぞれ、書き進められる方向に関連して、始筆部の用筆上の問題の生じやすさに違いが見られた。水平方向では、筆を右へと引っ

張る動作からツノ現象が見られ、垂直方向では、十分に加えられた筆圧が、筆を下へと動かす際にいろいろな抜け方をするのが、ツノ・コブ・ツノコブ・ネジレといったあらゆる現象を引き起こす要因となっていた。また、斜め方向では、進行方向へと運筆する際に曲線的な用筆が含まれることや、日常生活ではあまりない動作による運筆があるなど、それぞれの点画がもつ特有な問題からの影響を受けて、始筆における用筆傾向の発生に違いが見られることが分かった。

このようなことからすれば、始筆における用筆上のさまざまな問題は、書字者一人ひとりの書き癖として、一部の個人に偏って発生するようなものではなく、点画ごとの特質と関連して、誰でも引き起こしてしまう可能性があるものだということが出来るのである。

4. 今後の研究と指導法の開発に向けて

今回調査した点画への意識と、用筆の分析から表出した傾向を照らし合わせながら、基本点画の用筆について考えてきた。それぞれの点画に対して抱く書きやすさや書きにくさといった意識が、そのまま実際に書く際の用筆にすべて反映して表れるというような単純なものではなかった。しかし、点画を書く際に思うことや気を付けていることを自由記述してもらった意見を通して考えていくと、用筆サンプルや動画サンプルからだけでは分からない、それぞれの基本点画に起こる用筆上の問題を発生させる要因が見えてきたようである。

小論では、始筆に焦点を絞って用筆上の傾向について考えてきたが、入筆の角度一つをとってみても、標準の45度で統一することは難しいうえに、始筆から送筆へと動き出す際の僅かな運筆の仕方によって、さまざまな用筆上の問題が生じていることが浮き彫りになった。これらの分析を通してみると、どの点画においても、それぞれの点画の書き進められる進行方向や、形状へのイメージが先行してしまい、用筆の基本が忘れ去られているような状況が垣間見られた。

点画は、本来、始筆から送筆、そして終筆へと三つの過程を経て書き進められるものである。そのうちの一つに何らかの問題があれば、点画の形状を損ねることになる。始筆は、その中でも、点画を書くための最初の重要な部分である。にもかかわらず、点画の形姿などばかりに目が向き、肝心な始筆への意識が薄れてしまっているようである。そのため、入筆後に一度止まって必要な筆圧を加えることも不十分なままとなり、まだ送筆へと移行する体勢が整わないうちに、進行方向に動き出しているものが多くなっているようである。こうした始筆への意識の薄さが影響して、入筆の角度が点画ごとに揺れて定まらなかつたり、筆圧の抜けを引き起こして、さまざまな問題を生じることにつながっているのである。始筆部での問題は、送筆、終筆へと書き進めるにつれ、ひいては、点画全体の用筆上の問題へとつながることになる。そのようなことを起こさないためにも、まず

は始筆部での適切な用筆が定着することが求められるところである。

硬筆や毛筆での指導のほか、指導要領の改訂でも注目されている水書きを取り入れた点画指導を行う場合においても、始筆への意識を十分に持たせ、その重要性への認識を育てたうえで、送筆、終筆へと順に目を向けさせていくことが肝要である。

今後は、送筆、終筆についての分析も進め、始筆部での問題との関連性についても探っていきながら、点画の書き方への理解を深めるための指導の在り方についても考えていきたいと思っている。

〈注〉本研究は、文部科学省科学研究費助成金（基盤研究C：衣川彰人、課題番号25381251）による助成を受けている。

〈参考文献〉

- ・全国書写書道教育学会編『明解書写教育（増補新訂版）』平成25年4月 萱原書房
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』平成29年6月
- ・樋口咲子・津村幸恵「筆圧と穂先の動きに着目した基本点画の授業研究」平成24年全国大学書写書道教育学会（京都大会）

（きぬかわ・あきひと 本学教授）